

今日における博物館紀要等刊行物の流通に対する一考察

—大磯町郷土資料館を事例として—

大磯町郷土資料館 真保 元

はじめに

博物館では紀要などの研究報告が多数掲載された刊行物が発行されている館もあり、当館も例に漏れない。それでは、これらの刊行物がどれだけ公開されているだろうか。客観的に明らかにすることは困難だが、例えばインターネット上で検索でき、閲覧することができるかといった指標を設けることはできよう。今日、国立情報学研究所が運営するCinii Research（以下Cinii）をはじめ、ジャーナル類を検索する手段は多岐にわたる。

筆者の勤務する大磯町郷土資料館（以下当館）も1988年開館以来、歴代学芸員などによって数多くの研究報告類が蓄積されてきた。しかし、これらの刊行物類は多くがCiniiなどに表示されないまま、現在に至っていることが課題であった。そこで、本稿はこの課題を解決すべく取り組んだ当館の刊行物類の公開に向けた取り組みを事例として、今日における紀要等刊行物の流通のあり様を考察する。

1. 問題の所在—今日の博物館刊行物をめぐって—

当館の取り組みをめぐる前に、卑近だが筆者周辺の研究環境について簡単に触れたい。筆者は本稿執筆現在の2025年時点で成城大学大学院にも民俗学の大学院生として在籍している。いわば文系アカデミアの現状を垣間見ているが、大学院生・学部生のゼミ指導等の場に立ち会うことがあり、研究論文の探し方の一つとして教員から最初に案内があるのがCiniiなどのインターネット検索による論文検索である¹。キーワードを入力すれば論文がヒットし、インターネット上で公開されている論文ならばその場で読むことができる。先行研究を調査するにあたり、最初の手順となる。その後、それらの論文の参考文献類から連鎖的に関連研究が浮かび上がり、研究を深めることができる。

もちろん、上記で示した事例は一例であり、分野あるいは教員によって指導方針が異なることは考えられようが、Ciniiが今日の研究活動において

一助となっていることは否めない。Ciniiのような情報ツールは研究に不可分な存在となっている。

多数の郷土資料が集まり、調査が行われる場である博物館が刊行する紀要類は、地域の情報の宝庫である。例えば神奈川県博物館協会が刊行した『学芸員の仕事』でもテーマの一つとしてとりあげられており、当館元学芸員の佐川和裕によれば、紀要や年報といった刊行物は、資料や情報を視覚的に共有することを可能にするため、地域の人々や利用者への還元手段として大変有効だという（佐川, 2005: p.16）。

さて、Cinii等インターネットジャーナル検索が発達した現在、博物館の紀要類が抱えている課題の一つに、前述のCiniiに目次情報が掲載されないといった埋没性があると持田誠は指摘している（持田, 2016）。「今日ではインターネットで検出されない文献は、世の中に存在しないものと同然となりつつある」（持田, 2016: p.266）との指摘は正鵠を射るものであろう。持田と高田祐一はこの課題を克服すべく、奈良文化財研究所（以下奈文研）の「全国遺跡報告総覧」を活用したアクセス性と検索性の向上を提示した（持田・高田, 2021）。現在でこそCiniiに紀要類の目次が掲載されている博物館が増えてきたものの、掲載されていない館も多々あり、途上の段階にあるといえよう。

当館もまた、これまでCiniiへの登載が無く、後述するがホームページ上で公開はしていたもののアクセス性がやや乏しかった²。この問題を解決すべく、当館では奈文研の全国文化財総覧を活用し、デジタル公開の促進を図った。本稿ではその作業の一端を報告する。当館の刊行物の変遷をたどり（2章）、実際の作業内容の報告およびフィードバックを見ていく（3章）。

2. 大磯町郷土資料館での刊行物の変遷

当館の開館は1988年であるが、開館以前にも当館刊行の刊行物の系譜に位置づけることができるものがあつた。國見徹による整理を参考にすれば

(國見, 2024: p.33)、大磯町立図書館内に当館の前身にあたる郷土資料研究室(1983年開設)があり、刊行していた『資料室だより』がそれに該当する。『資料室だより』は1985年に1巻1号が刊行され、1988年刊行の3巻16号で幕を閉じた。調査概報のほか、資料収集の思い出も回顧されており、博物館学的に見た際に当館の歴史を振り返る資料となる。

開館後は毎年の事業報告を『年報』として年1回刊行している。『年報』に研究報告が載るようになるのは1997年からであり、それまでは『Report—大磯町郷土資料館だより—』(以下資料館だより)が小論文や調査概報を掲載する役割を担っていた。『資料館だより』は他館という博物館だよりに該当する刊行物で、1991年の刊行当初は年3回発行だったが、現在は年1回発行で、2025年現在は45号まで刊行されている。なお、『年報』は従来『年報—令和5年度—』と、『年報』に年月次が付されていたが、2024年刊行分より『大磯町郷土資料館年報』36号と巻次へ変更し、あわせて同じタイミングで書誌名に館名を入れることとした。

さて、1997年からは『年報』の末尾に研究報告が掲載され現在に至るが、なぜ当館では紀要が単体では存在しないのか。佐川によれば当初は紀要単体で刊行する予定があったが、財政的都合でできなかったとある(佐川, 2005: p.17)³。そのため、本稿執筆時の2025年現在まで、年報の末尾に研究報告を付す形となっている。年報には、大磯

町をはじめとした研究報告や当館の取り組みが数多く掲載されている。

以上、ここまで当館の刊行物の変遷を簡単にではあるが整理した。地域をまなぐす数多くの研究が積み重ねられてきたが、これらがCiniiなどに掲載されないまま、いわば灰色文献として現在に至っていた⁴。

3. 公開に向けた取り組み

—全国文化財総覧の活用—

(1) 公開までの流れ

今回の作業では、Ciniiに論文類目次が掲載されることを最終目標とした。表示するための手段にはいくつかの方法があり、博物館自らができる取り組みとして、例えば電子ジャーナルプラットフォームであるJ-Stageへの登録がある。

しかし、筆者自身が所属している研究団体でも、J-Stageへの登録はハードルが高いものとして位置づけられており、筆者自身業務の傍らで行うことが厳しく感じたため断念した。そこで、他の方法を模索したところ、奈文研を代表として推進している全国文化財総覧があった(2024年登録作業当時は全国遺跡報告総覧)。県内でも他館を見れば、神奈川県立歴史博物館の紀要は書誌情報および考古系論文の本文用PDFデータが掲載されている。相模原市博物館や平塚市博物館などの紀要も書誌情報のみだが掲載されており、Ciniiで表示されている。筆者も2024年10月ごろに登録手続き

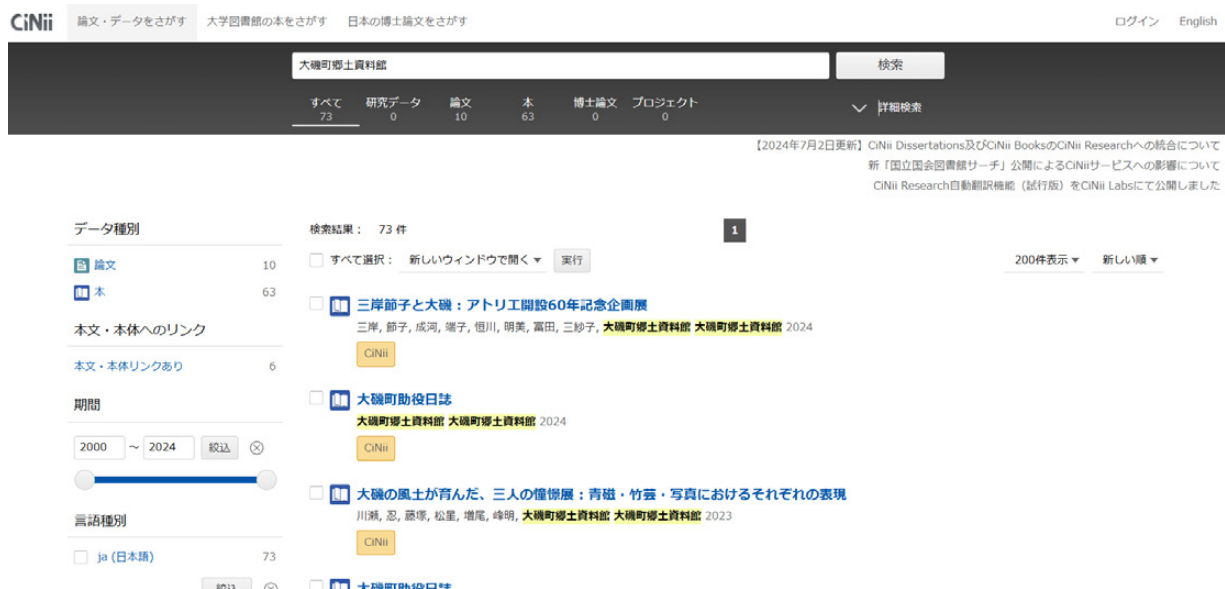


図1 登録作業前のCiniiでの検索結果 (2024年10月25日撮影)。

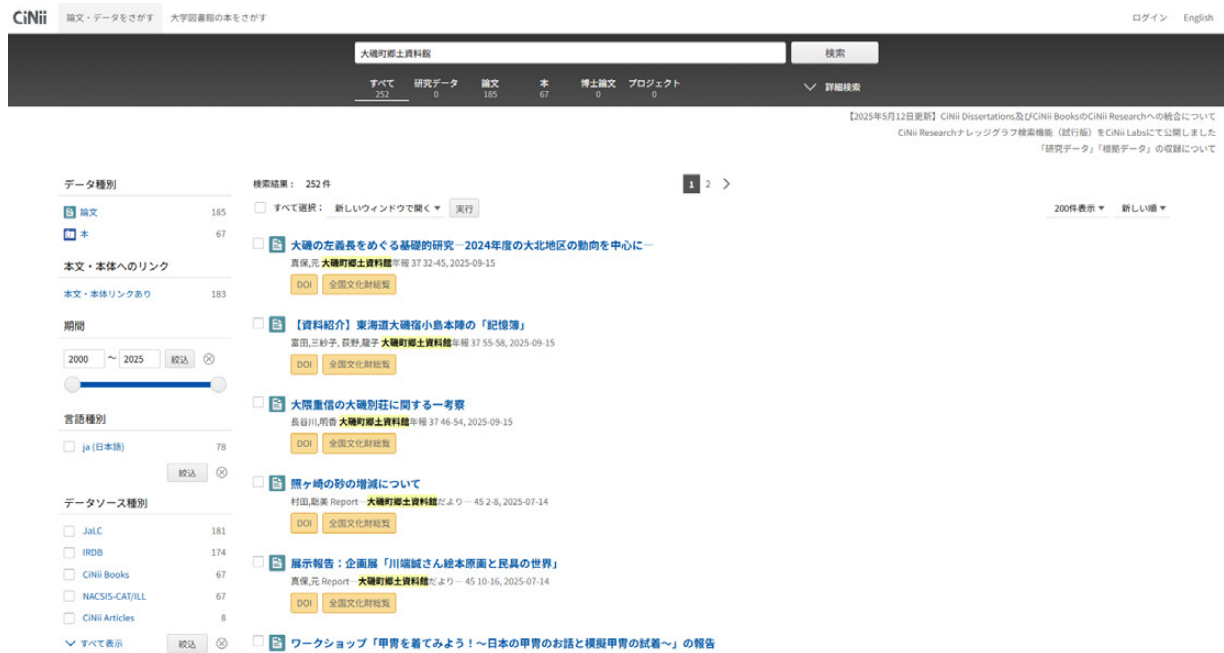


図2 登録作業後のCiniiでの検索結果（2025年10月23日撮影）。

を行った。事務局に迅速にご対応いただいたこともあり、手続きはすぐさま完了し、登録が可能になった。

登録作業自体は2024年10月18日から行った。2024年10月時点で当館での刊行物は年報36本、だより44本、資料室だより16本の合計96本があり、そのすべてを一度に登録することは不可能である。作業自体も筆者が一人で行っていることから、業務の合間を縫って入力していくこととなった。

実際の作業としては、ログインをしたうえで年報等刊行物のPDFデータを登録し、書誌情報を入力フォームに打ち込む。所要時間は、例えば37号（掲載論文数3本）の一連の登録作業を終えるのには約7分の時間を要した。隙間時間での作業となったため、最終的に2024年当時刊行されていた研究報告類をすべて登録したのは10か月後の2025年7月16日であった。なお、登録時に本文用PDFを登録するが、PDFはテキスト化されていることが望ましいとされていたため、テキスト化されていないPDFはAdobe Acrobatを使用してOCR化を行ったうえで登録作業を進めた。

(2) 所感

それでは、登録作業を進めた結果はいかほどか。図1は登録作業以前のCiniiでの大磯町郷土資料館の検索結果である。73件とあり、研究報告が表

示されず、当館の図録や当館を事例とした他の学会誌等に掲載された報告類がヒットするのみであり、当館のこれまでの研究活動はCinii上では可視化されてこなかったといってもよい。

一方で、2025年10月現在の検索結果である図2を参照されたい。登録作業が終わり、252件もの報告がヒットすることとなった。つまり、当館の約180件の論文類がこれまで灰色文献として不可視であったことがわかる。

全国文化財総覧では記事登録時に論文ごとに任意のキーワードを設定することができ、キーワードでCiniiの検索に表示することができる。そのため、『資料室だより』などの名前に大磯町郷土資料館を含まない刊行物も当館関連の刊行物として捉え、キーワードとして入力した。このほか、民俗学や自然、文献史学など学問分野の設定もできるため、設定することにより、「大磯町郷土資料館民俗学」などと検索することで、当館での各分野での研究の蓄積が件数とともに可視化できるようになった。

今回登録作業を進めた結果、いくつかの副産物を得ることができた。例えば、手元ですぐさま刊行年を確認したい時、スマートフォンやPCなどのデバイスを用いてCiniiで調べれば、どの刊行物に収録されているかを横断的に検索できるようになった。また、当館のホームページがアクセス障

表1 全国文化財総覧登録手続き後のアクセス等統計

年月	ページ表示回数 (1日)	ダウンロード数 (1日)	新規登録件数
2024/10	593(19.1)	0 ※PDF登載は12月から	30
2024/11	952(31.7)	0 ※PDF登載は12月から	1
2024/12	759(24.5)	578(18.6)	11
2025/1	1540(49.7)	944(30.5)	15
2025/2	2021(72.2)	1410(50.4)	12
2025/3	3897(125.7)	541(17.5)	2
2025/4	811(27.0)	899(30.0)	5
2025/5	2332(75.2)	565(18.2)	0
2025/6	2696(89.9)	520(17.3)	1
2025/7	1868(60.3)	1230(39.7)	9
2025/8	3157(101.8)	1301(42.0)	0
2025/9	6907(230.2)	1212(40.4)	1
2025/10	3410(110.0)	1551(50.0)	0
合計件数	30943	10751	87

害などで表示されにくいとしても、全国文化財総覧にアクセスすれば閲覧できるのも、リスク分散として有効である。

(3) アクセス解析

それでは、どれほどのアクセス数があるか、月ごとのアクセス数等を簡単にみていく。

当館年報にも2024年度分を記載しているが(大磯町郷土資料館編, 2025)、登録を始めた2024年10月以降(文化財総覧登載後)の各月のアクセス数およびダウンロード数は次の表の通りである。

総じて、2025年10月時点で実に30,943件のアクセス、10,751件のダウンロードがあった。アクセス数等と月ごとの新規登録件数は比例しないこともあり、アクセス数等増大の由来がはっきりとしない部分もある。いずれにせよコンスタントに毎月数千件のアクセスがあり、直近数か月では1日あたり40件前後のダウンロード数があることがわかる。

Ciniiなどに表示されることにより、当館の存在を知り、そこからホームページなどを実際に見て、活動を知ってもらうということにつながっているケースも想定できる。紀要等刊行物のオンライン公開は、方法によってはさらなる活用が見込まれるといえよう。

むすびに

本稿では博物館における紀要等刊行物の流通を照射すべく、インターネットが発達した現在の時流に合わせて当館としての実践例をもとに考察した。

オンラインでの公開は幅広い流通が見込める。そのうえで、Ciniiなどのジャーナル検索エンジンに表示させることは、その流通を加速させることが想定でき、今日の博物館刊行物の還元手段の一つとして有効であろう。しかし、Ciniiは研究者の利用がボリューム層として想定され、一般利用者へのより広い認知についてはさらなる検討が必要である。畢竟、収蔵資料だけではなく、紀要をふくむ刊行物類も博物館の大切な財産である。これら刊行物がより広く普及していくことも、今日における課題の一つではないだろうか。

註

- 1 論文を検索する際、筆者の専攻とする民俗学ではCinii や国立国会図書館サーチ、Google Scholarなど、いくつかの情報ツールを用いている。本稿では卑近な例だが筆者が最も利用するCinii を中心的に取り扱いたい。
- 2 近隣館でいえば、2025年10月時点で平塚市博物館や小田原市郷土文化館の紀要は雑誌記事索引に採録されており、検索に表示される。
- 3 もっとも、2025年現在こそ学芸員は正規職員で5名、非常勤で1名いるものの、従来は3名前後で推移していた。そのため、まとまった数の研究報告をコンスタントに執筆していくことが困難であったことも一因であるという(2025年11月

に國見徹氏よりご教示）。

4 刊行物として、リーフレットや図録も想定できようが、あくまでも本稿では論文類を整理の対象とした。なお、他館の紀要等刊行物を見る限り、国会図書館の雑誌記事索引に採録されるケースが多いが、当館刊行物は現状雑誌記事索引の採録誌となっていない。採録しない雑誌の基準として、「記事による検索よりも雑誌名による検索が有効である雑誌（毎号ほぼ同じタイトルで記事が掲載される要覧、事業報告、白書、年鑑等）」とある（国立国会図書館HP「雑誌記事索引について」<https://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/index.html>より、2025年11月3日閲覧）。当館の年報も事業報告がメインであったことから、採録されていなかったと考えられる。民俗学が専門の筆者にとって図書館情報学などは専門外であり、あくまでも門外漢の推察になる。この点について、詳しい方にご教示いただければ幸いである。

引用文献

- 國見徹2024「博物館の醸成一神奈川県大磯町の事例―」『駒澤大学博物館学講座年報』2023年度：pp.33-36.
- 持田誠2016「博物館と生態学（25）いま市町村の博物館紀要が直面している課題」『日本生態学会誌』66：pp.265-270.
- 持田誠・高田祐一2021「紀要論文等の書誌情報流通における課題と「文化財論文ナビ」の取組」『カレントアウェアネス』350：pp.2-5.
- 大磯町郷土資料館編2025『大磯町郷土資料館年報』37.
- 佐川和裕2005「紀要・目録の刊行」神奈川県博物館協会編『学芸員の仕事』岩田書院：pp.16-19.